

南信州の獅子舞—大型練獅子の誕生と展開

飯田市美術博物館 櫻井弘人氏

1、「民俗芸能の宝庫」—南信州

ご紹介いただきましたように、私は遠山出身で、子どものころから遠山霜月祭をずっと見続けて来ました。飯田市美術博物館に入ってから、遠山霜月祭をはじめ、南信州の民俗芸能を調べてきました。今日、お話しする獅子舞にはなかなか手が届かなかったのですが、平成22年に特別展を開催することになり、その時にいろんなことを調べた結果、少しずつですがわかってきたことがあります。今日の話はいろいろなところでお話していることの繰り返しになりますが、いくつか新しい知見も加えながらお話しさせていただきます。

この高森町は民俗芸能を大切にされている所ですね。ここに『高森町民俗芸能史』という本がありますが、レベルがすごく高いです。よくこれほどおまとめになったと感心します。そんな高森で話をさせていただくと、もっと勉強しろと叱られそうで恐々としているところです。

本日は「南信州の獅子舞—大型練獅子の誕生と展開」と題して、お話しさせていただきます。私は幌を被せて練り歩く巨大な獅子舞のことを「大型練獅子」と総称し、「屋台獅子」と「籠獅子」に分けて呼んでいます。

この南信州は「民俗芸能の宝庫」と呼ばれます。本当にいろいろなものがあるんですね。遠山霜月祭のような古い芸能もあれば、大型練り獅子舞のように比較的新しい部類に入ってしまう芸能もあります。

長野県内には国指定重要無形文化財が10件ありますが、そのうちの6件—雪祭、天龍村の霜月神楽、遠山の霜月祭、新野の盆踊、和合の念仏踊り、大鹿歌舞伎が飯田下伊那です。また、国指定の前段として「記録に残さない」という国選択無形民俗文化財は県内に22件あり、そのうち11件が飯田・下伊那です。長野県の地区別に表してみても、飯田・下伊那がいかに卓越しているかが一目瞭然で、この地の凄さがわかります。長野県って非常に広いですね。その中で南端に位置する南信州、飯田・下伊那に半数が集中していることは、強く自覚していると思います。

国指定無形民俗文化財の一覧をみると、阿南町、天龍村、遠山、阿南町、阿南町、大鹿です。大鹿村を除いてはみな飯田・下伊那の中でも南端の山間地に偏っています。国選択の方を見ても一部、人形芝居とか歌舞伎が以外は、ほとんど南端に集中しています。そしてその分布圏は県境を越えて愛知県、静岡県へと延びていきます。三遠南信そのものが民俗芸能の宝庫です。いずれも中世から近世初期にさかのぼりうる民俗芸能で、神事色が強い神事芸能です。

それに対して、飯田周辺にあるのが黒田人形、早稲田人形、今田人形、大鹿歌舞伎です。長野県無形民俗文化財に指定される大島山の獅子舞や清内路の手作り花火、深見の祇園祭もそうです。深見以外はいずれも近世中期以降の娯楽芸能です。娯楽芸能という用語があるかもしれませんが、人形芝居にしても歌舞伎にしても京都、大阪、名古屋、江戸といった大都市で、都市住民の娯楽芸能として流行したものです。煙火も三河の城下町で盛んになりました。それがこの谷へ入ってきて神社の祭礼の奉納芸として取り入れられるわけです。

皆さんは三隅治雄先生をご存知ですね。先生は南信州を「日本の芸能史の縮図」だと言っています。南信州には古い時代の芸能から近世、近代、そして現代の芸能までがあるという意味です。大型獅子舞も江戸時代後期に起こって、明治時代以降に広がりました。今や人形フェスタとか獅子舞フェスタなど現代的なイベントも盛ん

です。

国指定、国選択の文化財は、一部に近世のものが国選択になってはいますが、ほとんどはそれ以前の古い時代に起こった芸能です。やはり国の指定では古さを重視し、近世以降の芸能との間には大きな壁がありました。ところが昨年、大鹿歌舞伎が国指定になりました。これは歌舞伎、地芝居として全国で初めてです。南信州の芸能がその大きな壁を打ち破った。これは凄いことですね。

さて、近世の芸能は大きく見ると春祭りと秋祭りに分けられます。これがもっと古い芸能になると年間通していろんな祭、行事がありますが、近世になると大きく春祭り、秋祭りに分けられます。あるいは、その他に夏の祇園祭りが入ってくるかもしれません。

春祭りとしては、まず人形芝居が入ってきます。それから約 50 年後に歌舞伎が入ってきます。そしてまた大型練り獅子が明治以降に広がる。祭りを担った若者たちが流行を追って移り変わっていくわけですね。それに対して、秋は一貫して煙火なんです。煙火が入ってきたのは人形芝居と同じ元禄年間（1688～1703）です。高森町吉田の煙火も元禄年間に始まったと言いますよね。そして、こういった村の芸能に大きな影響を与えたのが、飯田というマチの芸能です。

2. 日本と長野県の獅子舞

それでは獅子舞の話にしていきます。

日本の獅子舞の歴史について、私はあまり不勉強なので大雑把にいきますと、まず伎楽が百済から入ってきます。それに伴って獅子舞が入ってくるわけです。東大寺の開眼供養会などに登場してきます。それに遅れて舞楽が入ってきます。行道といって大きな神社の祭礼やお寺の法会に練り歩く。そういった獅子舞なんですね。近世には伊勢の大神楽という伊勢神宮や熱田神宮に仕えてお札を配って歩く人たちが、各地を巡業して獅子舞を演じました。それは中世末に起こったともいわれますが、はっきりしません。獅子舞は獅子の中に 2 人以上入ることから、二人立ちの獅子と呼ばれます。それに対して東日本に分布しているのが一人立ちの獅子舞です。一人が獅子頭を被って踊るといえるものですね。三頭がセットになるのが多く、東日本に分布しています。

長野県内には約 550 ケ所獅子舞があり、獅子舞の宝庫といつてよいのですが、それを種類別に見たとき、先ほどの三匹獅子が東信に入ってきていますが、全域に分布しているのは大神楽系の獅子です。そして飯田・下伊那には大型練り獅子が分布しています。巨大な獅子舞は長野市の市街地の権堂などにもありますが、これは新しいものです。

3. 南信州の獅子舞

南信州には獅子舞が 80 か所くらいにあります。その中に練り獅子や大神楽獅子、その他、霜月神楽やオコナイに取り入れられたものがあります。

1) 練り獅子（行道の獅子）

行道の行道は、古い神社やお寺に伝わっています。美術博物館に展示してある松尾の鳩ヶ嶺八幡宮の獅子頭は南北朝から室町時代初期の古いものです。ただ芸能は伝わっていませんが、日照りが続いたときに天竜川に持って行って水を掛けると雨が降ったといわれます。

下條村の大山田神社では、行道の伝統を今に伝えています。現在使っている獅子頭は正徳元年（1711）ですが、古代の作といわれる古い獅子頭が残っています。いずれも、その特徴は、鳩ヶ嶺八幡宮と同じく鼻先までの長さが長く、扁平なところにあります。祭りでは、大山田神社の社叢の参道を練る行列の先頭に獅子がいて、後ろに神輿がつかます。獅子を曳く面をへエオイと呼びますが、伎楽で獅子を曳く獅子児のことを「蠅追い」とも呼ぶところからきています。また、行列のことを下條ではギョウドと呼んでいますが、これは行道のことで、伎楽の

名前をそのままに伝えているのです。

大山田神社の拝殿に掲げられた絵馬があります。境内の一角では弓矢を射る備射祭がおこなわれ、左手の舞台では、大勢の人が押し掛けて歌舞伎を見ている。その手前には細工店が出ています。そして、境内の中央に神社に向かって描かれている行列が、備射祭行列という獅子舞を伴った行列です。それを拡大すると、中啓を持った神人、弓矢を持った人、神輿、天蓋、あとその後ろに、爺とおかめがいて、ヘイオイに曳かれた獅子を描かれています。行道の姿が描かれています。

2) 大神楽系の獅子舞

次に、大神楽系の獅子舞です。これは中世末から近世初期、伊勢神宮や熱田神宮のお札の配布を請け負った下級の宗教者が、獅子舞を持って全国を巡業して歩いたものです。この地方にも当然入ってきました。その特徴は、獅子舞に曲芸がついたことで、人寄せをするためにはいろんな芸能を演じました。こういった外来の宗教者が演じていた獅子舞を、江戸時代の中ごろから村の若者たちが彼らから教わったりして自分たちでやるようになります。それが明治時代にかけて南信州に広がっていきます。

天龍村福島町の獅子舞では雌獅子と雄獅子の二頭が登場します。幌の中に頭を使う人ともう一人が入る二人獅子の獅子舞です。遠山の南信濃の此田獅子は一人で頭を被って鈴と幣束を持って演じます。立石の獅子舞は「丸一」という芸能集団から教わったといっています。彼らが神輿の中に獅子頭を収めてまわり、演ずるときに神殿風の屋台を組み立てて、そこに獅子頭をまつってから舞を舞い始めます。元はおかめの舞とか漫才、曲芸、曲とりなどもやったといわれています。阿智村の木賊獅子では、今も段物つまり歌舞伎の一場面を獅子が演じます。後ろにひょっとこが幌を束ねて持っています。これが道を歩くときは幌の中に入って二立ちとなったのです。

3) 大型練り獅子

大神楽系獅子舞が天龍村とか遠山とか大鹿とか、山間地に大神楽の獅子が多く残っているのに対して、大型練り獅子は飯田盆地とも呼ばれる天竜川沿いの平坦部に伝承されています。そのうち、「屋台獅子」という車輪をつけた屋台に幌を被せるタイプの獅子舞は天竜川の西岸に、「籠獅子」と私が呼んでいる車輪を持たないタイプの大型練り獅子は天竜川の東岸に広がるという具合に、分布域がはっきりと分かれます。屋台獅子の源流とよくいわれるのが大島山の獅子舞、籠獅子の源流と考えられるのが阿島の獅子舞です。

このように分布がはっきり分かれるのはなぜでしょう。屋台獅子は車輪がついた屋台に幌を被せますから、屋台自体に重量がある。ですから道が広くないとこの獅子は扱えないわけです。それに対して籠獅子は車輪がなくて、中は竹で編んでいて軽く、中に入った者たちが担いで歩きます。よく阿島の獅子は暴れ獅子だと言われますが、車輪がなくて軽いから飛んでまわれるわけです。しかも天竜川東岸は段丘崖がすぐ後ろに迫っていて傾斜が多く、道が狭くて曲がりくねっている。そういうところでは車輪の付いた重要のある獅子は曳き回すことができず、なにより軽さと機敏さが求められます。ですから天竜川の東西の地形が屋台獅子と籠獅子の分布に影響しているといつてよいでしょう。さらに、阿島は阿島傘の本場で竹細工に非常に長けていたことも、籠獅子を生み出した要因と考えることができます。

4. 大島山瑠璃寺獅子舞の誕生

それでは西岸の源といわれる大島山瑠璃寺の獅子舞についてみましょう。瑠璃寺の本尊薬師如来三尊像は重要文化財に指定されており、天永3年(1112)に寺院ができたといわれています。この寺は天台宗で、江戸時代の寺領は25石でしたが、頼朝がこのお寺を祈願所に定めたともいわれていて、当時は750石あったともいいますから大変に大きな寺院でした。獅子舞はこの寺の開山とともに始まったといわれています。

今日の獅子には、宇天王や猿、男鬼・女鬼がつかます。そして宇天王は舞楽の所作を伝えており、手綱を持って獅子を曳きます。そのモチーフは、鎌倉時代の彫刻や絵画にみることができます。宇天王はいち早く仏教に帰

依したインドの王様といわれます。獅子も単なる獅子ではなく、文殊菩薩が乗る獅子座です。つまり、五台山文殊信仰の仏教説話を獅子舞として表したのが瑠璃寺の獅子舞なのです。

それでは、この瑠璃寺の獅子舞の起こりと歴史をみていきたいと思います。

『万覚書』という記録が瑠璃寺に残されています。そこに獅子の由来が書いてあり、「彼所に堂塔寺院を建立し毎年三月八日には獅子児の舞の儀式を殊ニ鎮守ハ坂本山王廿一社灌頂して以て祭礼とする。依之中興の当所ニ而も昔を追て其儀式怠慢なしと承及候。」とあります。寺院ができたときから3月4日に獅子児の儀礼を始めた、というのです。そのあと、「然と雖其後時移り乱世以後いつとなく彼の儀式も廃退いたし」、つまり獅子舞が衰えた、絶えたとあります。瑠璃寺は織田信長の焼打ちにあったといわれており、そうした戦乱の世に古い伝統的な獅子舞が途絶えたというのですね。

その後「つく／＼思ふに獅子と申は法華經ニ云く遊行無畏如獅子王と是如来の金言難有御ことなり。誠に獅子王申すは十万世界を遊行するに勇猛堅固にして無碍自在の徳をそなへり」、そして、「爰を引所はさと豊に民やすふして厄難災ゲ記をはらい、その身獅子王のごとく勇猛堅固にして常に無碍自在の徳をたのしむこゝろなり。」、つまり、獅子を曳くことによってその里というのは非常に安らかな里になるのだ、と獅子の功德を説いています。最後に「然れハ今は参詣の衆中もおのすからその徳にかなはん。依之今日幸ひ祭礼に所祈祷の為纔にむかしの片ばかりの儀式をまなて之を興行す」、つまり昔の型を習って獅子舞を再興した、復活したというのです。

では、この復活がいつのことなのか。やはり瑠璃寺の文書の中に『年暦私記』という記録があり、その中の見開きページに、宇天王の面を享保10年(1725)に飯田工匠楠木源右兵衛が作ったと書いてあります。そして次の行に、享保12年に陵王の面をこしらえて、「獅子陵王の舞」を興行した、陵王の舞は「テト拍子なり」と書いてあります。ですから、享保10年に宇天王、2年後に陵王の面をこしらえたことがわかります。

さらに、その隣には、上穂村(現駒ヶ根市)光前寺陵王の面に享禄3年(1530)の銘があることが書いてあります。つまり瑠璃寺の獅子舞の復活の記事と、光前寺の面の話が並んでいる。これはどういうことかということ、瑠璃寺の面を作るにあたって、どうも光前寺の面を参考にしたらしいと推測できます。

光前寺は瑠璃寺よりも古く、貞観2年(860)の開山で、本尊は不動明王です。同じく天台宗でありながら、江戸時代には60石で、瑠璃寺の倍以上の石高を誇っていました。60年に一度の御開帳では、越天楽や五常楽、加陵頻、蝴蝶楽など格式の高い芸能をやっており、その最後に青獅子が登場して、人々が踏み固めた境内に雨を降らせて清めたといわれています。昭和31年と44年の写真をみると、今は絶えてしまった舞楽の舞が写っています。記録では長元5年(1032)にも舞ったとあります。

光前寺の獅子頭は青獅子です。その銘には「熱田之住森満家法眼 同小拾郎満泰公／元和六曆庚申霜月吉日

時住時 法印尊応」と書かれていて、元和6年(1620)の作だったことがわかります。調査の際に獅子頭を納める木箱の中に入っていた幌を広げてみたところ、数人が入る二人立ちの小さな獅子であったことがわかりました。青獅子は大変に呪力の強い雨乞いの獅子だと信じられ、木箱から取り出すときにはご住職がコップの水一杯を供えるのが決まりです。それによって雨を呼ばなくなるというのです。この獅子が最後に舞ったのは大正13年(1924)8月のことで、日照りが続いたので雨乞いのためにこの獅子を出して本堂へと向かって行道していったところ、途中で村人が獅子に水をかけてしまった。そのためこのままでは雨が降らないので、ある村人が獅子頭を担いで駒ヶ岳山頂まで登って行くと、雨雲が湧いて雨が降りだし、獅子頭を追って雨が里まで下りてきた、という話が伝わっています。

この獅子につく陵王面には、『年暦私記』に記されたとおり享禄3年(1530)の銘があります。もう一つ、年代不明の宇天王面がありますが、たぶん同じころの作だろうと思われま

す。瑠璃寺には、残念ながら火災で焼けてしまいましたが、青獅子がありました。この獅子も雨を呼ぶと信じられ、日照りが続くと雨乞いのため不動滝まで持って行ったといわれていました。そしてその後、享保17年(1732)

に朱漆塗りの獅子頭が作られました。これが最近まで使われていた獅子頭です。

光前寺と瑠璃寺の種漆塗りの獅子頭2つを比較してみると、瑠璃寺のはデフォルメされていますが、3本の渦巻きの髭と顎鬚の形、鼻や眉毛の形が光前寺のとまったく同じです。瑠璃寺の獅子頭は光前寺のそれを真似て作ったに違いありません。宇天王面も陵王面も光前寺と瑠璃寺の面はそっくりです。やはり瑠璃寺の二面は光前寺の面を忠実に写して制作したのでしょう。

では光前寺では、どういうふうに使われていたのか。たぶん青獅子には、宇天王のセットになって行道していく「獅子子の舞」と、陵王とセットになる「獅子陵王の舞」がありました。瑠璃寺もこの二つの舞の復活をめざして二面を制作したのでしょう。

光前寺の境内図をみると、客殿から出て右に折れて参道を進むと門を潜ったところに池があり、弁財天が祀られています。その横には舞堂（現在の奏楽堂）と書かれた建物があります。客殿を出て参道を歩いて行く間が「獅子児の舞」で、この池の端で舞ったのが「獅子陵王の舞」だったと推測できます。大正9年の写真を見ると、池の中に設けた舞台の上で胡蝶楽を舞っており、池の端の奏楽堂では囃子を奏でたのでしょう。舞台を支えた礎石が今も池の中に残っています。ここに陵王が出て青獅子を操り、雨を呼ぶ雨乞いの舞を舞ったと考えられます。

では、瑠璃寺はどうかというと、青獅子は不動滝から出現したという言い伝えがあります。そして参道を歩くときは「獅子児の舞」、薬師堂前の池の端で「陵王の舞」を舞ったと考えられます。

次に、もう少し詳しく獅子頭をみていきます。光前寺の獅子頭には下顎の下部に、顎材から一体的に彫り出した大きな取っ手がついています。ここを片手で握って獅子頭を支え、もう片手で軸棒を持って頭を操ったのでしょう。両箇所ともに手垢がついて磨れています。また、顎の一番奥の歯がなく、隙間ができています。ここに手を入れて顎の開閉を操作したのでしょう。今の高森町の獅子頭を見ても、やはり隙間があり、ここに手を入れて握り、顎を開閉させて舞っています。

では瑠璃寺の享保17年に作られた獅子頭は、形は光前寺の青獅子に似てはいますが、構造が全然違います。注目したいのは、顎板に頭がすっぽり入る穴が作られていることです。つまりこの獅子頭は、大神楽のように頭に被って演じた獅子だということがわかります。当時、大神楽が流行していたので、瑠璃寺では大神楽の獅子として作ったのでしょう。その証拠にやはり『万覚書』に瑠璃寺の獅子舞の事が詳しく書いてあるのをみると、獅子の幌には二人が入り、それに宇天王と想われる曳き手一人がつかまりました。さらに本禰宜、社次、御子を伴い、楽器は笛、鼓、三味線、太鼓、鉦鼓、ササラが奏されました。これは大神楽ですよね。その動きが細かく書いてあるのをみても、本堂正面から本堂一回り、下の参道、庫裏の前庭、参道、池の端、本堂の庭、山王権現の前、というふうに歩いており、これは巨大な獅子ではこのような動きは無理なことです。

ところが、現在の瑠璃寺の獅子舞はもちろん大神楽ではありません。その使い方は、下顎の奥に手を入れて顎を開閉させて舞っていますよね。そこでもう一度、獅子頭を見ると、この手を入れる隙間、光前寺はその部分の歯が作ってありませんでした。だから手が入れたんです。けれども瑠璃寺の獅子頭は歯があって隙間が無いんです。でも現在は手を入れることができる隙間がある。当初この顎を支えていた軸棒を下にずらして付け替えることによって、隙間が生まれ手が入るようになった。こうして現在の獅子の扱い方ができるようになりました。

瑠璃寺獅子舞の大型化 それでは、瑠璃寺の獅子がいつから大型化したかというのですが、井出道貞という人が天保5年（1834）に脱稿した『信濃奇勝録』という本があります。その中に「毎年三月八日薬師の縁日とて大なる獅子の形を造り 孟転王と云者これを牽 猿の面を被し者一人幣帛を持って前に立 又鬼の形に出立者二人鉄棒を以て前を掃ふ 笛太鼓の拍子いとひなひて古雅なり」と書かれています。つまり、「大なる獅子」に「孟転王」「猿の面」「鬼の形に出立者二人」が付いた、今と同じ獅子が天保5年には成立していたことがわかります。

先ほどの『万覚書』に書かれている獅子は大神楽系の獅子でした。獅子が二人、曳き手、宇天王がついて、本禰宜、社次、御子がついた大神楽系の獅子ですね。それが天保5年の『信濃奇勝録』では大きな獅子になってい

る。となると、この間のいずれかに獅子が大きく変わったということになるわけです。

この獅子は享保10年から17年に復活させていますが、それは享保20年の第二回御開帳を契機に、絶えていた獅子舞を復活したのでしょうか。ところが当時は大神楽の獅子が流行していたので、その形に改めた。

そして、次の寛政8年(1793)の第三回目御開帳にあわせて、大神楽の獅子をやめて舞楽系の獅子に改め、そして巨大な屋台獅子にしたと推測できます。

それではもう一度、歴史で辿ってみましょう。獅子舞が伝わったのが天永3年、そしてこれが衰えます。寛政13年に初めての御開帳が行われました。次の御開帳は享保20年ですがこれにあわせてお面を作り、獅子舞を復活した。しかし、これは大神楽の獅子でした。

次の第三回目のご開帳は寛政8年ですが、これにあわせて客殿とか庫裏、表門を再建しています。現在、最初に客殿の前庭で起きて舞いだした獅子は、表門を潜って参道へ出ます。この表門の大きさに合わせて巨大な獅子を作った。そして表門の外側は傾斜をもつ坂道となっていますが、石段ではなくて傾斜で降りられるようにしたのは、屋台獅子が曳きやすくするためだったと考えられます。

大正5年(1916)の第五回の御開帳の写真をみると、大勢の人で賑わっています。この時にも巨大な獅子を曳きました。大洞家にある記録には、「開帳大当たりニ御座候、三月八日ヨリ十一日迄、(中略)獅子三度引、大当りニ而大ヘン也」と書いてあります。ですから獅子舞は御開帳の大きな目玉だったのです。そうやって見ると、光前寺の獅子を真似て作ったときには大神楽の獅子でしたが、第三回目の御開帳のときに屋台獅子に変えたといえます。そして、単に巨大化しただけではなく、天台系の教義、五台山文殊信仰に基づいた意味づけにもどしました。「獅子は釈迦の説法、宇天王は獅子の使い手、猿は本地仏薬師如来の垂迹、鬼は善悪不二の象徴」という意味づけです。獅子を巨大化したということは、文殊菩薩が乗る獅子の力を誇示するためです。御開帳という一大イベントにあわせて、それにふさわしい演出を作り上げたのです。

余談 青獅子と雨乞い ここでちょっと余談です。獅子は青獅子だったということを言いましたけれど、実は今日、獅子頭というと赤ですよ。でも古い獅子は青なんです。鎌倉時代の彫刻をみると青色です。鎌倉時代の絵画をみても青いです。どうも獅子はもともと青かったようです。青いところから雨乞いにも使われる。それがある時点で赤く変化してきますが、多分、赤というのは疱瘡など疫病を鎮める威力があると信じられたことに関係すると私はみています。ですから古い獅子が青いというのは道理に合っているわけですね。この青い獅子は一方で龍として考えられます。大山田神社の獅子はもともと龍だったといわれていて、この姿を描いた絵も残っています。

鳩ヶ嶺八幡宮に残っている獅子も、唇だけが赤くて黒いですが、これも青獅子と考えてよいかと思います。光前寺も青獅子、瑠璃寺も青獅子がありました。下栗の霜月祭にも龍頭(たつがしら)というのが出てきます。ちんちゃこという子どもが被る面が頭を叩くのですが、これもたぶん龍を怒らせて雨を降らせるという雨乞いです。

余談 獅子と牡丹 もう一つ、ついでにいつておきます。瑠璃寺の獅子には幌に牡丹の花が大きくあしらわれます。そして獅子花がつきます。これも五台山文殊信仰にもとづいています。喬木村の真浄寺の屏風には、牡丹の咲き誇る中で獅子2頭が遊んでいる絵が描かれています。文殊菩薩の使い手である獅子が、牡丹の咲き誇る中で遊び戯れるというモチーフは、能の「石橋(しゃくきょう)」から来ています。「中国・インドの仏跡を巡る寂昭法師が中国の青涼山にある石橋付近に着くと、ひとりの樵の少年が現れ、橋の向こうは文殊菩薩の浄土であること、その橋は狭く長く、人の容易に渡れるものではないことなどを教えます。そして、ここで待てば奇瑞を見るだろうと告げて姿を消します。やがて橋の向こうから文殊の使いである獅子が現れます。香り高く咲き誇る牡丹の花に戯れ、獅子舞を舞ったのち、もとの獅子の座、すなわち文殊菩薩の乗り物に戻ります」。こういった物語なんですね。

ですから獅子舞に牡丹がつくのは天台文殊信仰から来ており、瑠璃寺の獅子舞にこそが相応しい。獅子に牡

丹をあしらったり獅子花をつけたりするのは瑠璃寺から始まっていると考えてよいと思います。

5、獅子の大型化

では、瑠璃寺の獅子が飯田・下伊那で一番早く大きくなったかということ、そうではありません。もっと古いのが飯田お練り祭りに登場した飯田の松尾町一丁目の大獅子です。宝暦2年(1752)に大きな獅子頭を作っています。松尾町三丁目には漆職人がいたので、漆を塗って目には黒曜石を嵌めてあった。これが「松一獅子」と呼ばれた飯田の大獅子です。ただこれは飯田大火で焼けてしまいました。飯田のお練り祭りは飯田城下の18ヶ町、橋南十三ヶ町、橋北五ヶ町がそれぞれの町内が旗屋台、囃子屋台、本屋台を曳きまわしていました。これに花笠がついたりいろんな踊りがついたりしたんですが、松尾町一丁目ではプラスアルファして大獅子を加えました。ではなぜ大きな獅子を加える必要があるかということ、飯田のマチの華やかなお練り祭りでは、巨大な獅子でないといふ人目を惹かないんです。だから巨大な獅子を生み出しました。

次に巨大化したのは阿島の毘沙門天祭りです。飯田は外様大名堀侯のお膝元ですが、阿島も旗本知久氏のお膝元です。そこでもお練り祭りと同じような祭礼をやりました。ここでは飯田でいう旗屋台を旗框と呼び、それに囃子屋台がつきました。そこに在から加わったのが阿島の獅子です。明和6年(1769)の記録に「二月朔日里原若者祭礼ニ始メ而獅々引」とあって、安永2年(1773)には大きな幌を作ったという記録もありますので、このときから巨大化したことがわかります。

ちなみに、飯田もそうですが、獅子よりも囃子屋台の方が格上なんです。阿島でもそうです。囃子屋台が本流とっていいかと思えます。

獅子の大型化の流れを見ますと、まず最初、宝暦2年に飯田城下のお練り祭りで松尾町一丁目の巨大な獅子が生まれます。それをほぼ20年後に旗本の知久氏のお膝元で真似て巨大な籠獅子を作ります。さらにほぼ20年後、瑠璃寺で第三回御開帳にあわせて巨大な獅子にした。こうした流れが推測できるのです。

真金小粒の囃子 もうひとつ、ついでにいます。シンキンという曲があります。瑠璃寺にも牛牧にもありますし、飯田・下伊那の24の獅子舞にこの囃子がつきます。鼎の下山では「サア一貫ろた サア一貫ろた 新金小粒を二分貫ろた そのなか一分を名古屋へやろうても使われず お江戸へやろうても貰われず」といった歌です。これは何を唄っているかということ、贋造二分金騒動という明治の初めに起こった大事件のことです。明治2年(1869)の戊辰戦争で官軍はいろいろ費用がいるのですがお金が無い。そこで贋金を作って軍資金を大量に得ようとしたわけですが、それが禁止されます。そうすると、飯田が非常に潤っている所と知って、飯田にその贋金を大量に送り込みました。それによって飯田の経済が破綻するんですね。そこで、困った農民たち1万3000人が一揆を起こします。そして飯田の町に押し掛けて打ちこわしとかいろいろなことをやるわけです。その結果、贋二分金を正しいお金に引き換えます、贋金を使った商人たちを罰します、一揆を起こした者たちは罰しませんという約束をとりつけた事件がありました。一揆側が完全勝利になったのですが、このことを歌った流行り歌を獅子舞に採り入れたのです。

そのことは佐藤一成さんという方が『飯田下伊那の獅子舞と関島金一郎のこと』という本に詳しく書いています。「これら「シンキン」の歌詞には、(中略)飯田二分金騒動に勝利した民衆の歓喜が唄い込まれているかのようだ」といっているわけです。ちょっと脱線しました。

瑠璃寺獅子舞の伝播 瑠璃寺の獅子舞は現在「屋台獅子の源流」といわれるように、周りに広がっていきます。もともとこの獅子舞は門外不出でした。そして獅子を使うのは長男に限られました。なぜかということ、次男三男は他の所へ行ってその芸を教えてしまうからで、厳しく制限していたんですね。

ところが明治になって、明治12年頃に瑠璃寺の師匠たちが牛牧に教えるわけですね。そして次はその獅子をやりたいという東野に、牛牧の師匠が行って懇切丁寧に教えています。瑠璃寺→牛牧→東野という流れがありま

す。

今回、獅子舞の獅子を飾り付ける間にちょっと調査させていただきました。

牛牧には嘉永元年（1848）頃の作かといわれている王仁・阿直岐・巫別という古い面があります。王仁は宇天王に似ていますが、百済の王様、帰化人をかたどっているといわれます。これを作ったのは飯田の仏師であった9代目の井出修正、本名は松三郎です。実はこの面と非常に作りのよく似た面が遠山霜月祭りにあり、これも松三郎の作と推測できます。王仁面も明らかに宇天王を真似していますが、宇天王とは名乗らなかつたんですね。

次に明治12年に宇天王を作ります。そして瑠璃寺では男鬼と女鬼なんですけど、ここでは関羽と張飛という三国志になぞらえた鬼の2面を作りました。大獅子は尾張国名古屋の丸屋伊兵衛の作といわれています。この獅子頭は先ほどみたような獅子とは使い方が違います。横に取っ手が付いていて、この巨大な獅子を扱うために従来の獅子頭の使い方を改めて独自の工夫をしたのです。

今度は東野です。東野は江戸時代にはお練り祭りを担った城下18カ町には入っていませんでしたが、明治になって氏子町になりました。そこで、明治35年のお練り祭りに何を出すかといったときに、巨大な張りぼての獅子頭を作るんです。竹で骨組みを作って紙を貼った獅子、この巨大な獅子は人気を呼びました。でも舞はよたよたと前進するだけの舞でした。次回の明治41年も同様でした。そこで大正3年のお練り祭りには牛牧から宇天王の舞を習って、宇天王を加えました。でもやはり獅子は巨大なので前進して引き上げるしか舞えないんですね。どういうふうにしたかというところ、一人が獅子頭を背負って、両脇に付いた2人が支えました。この年には大王路町でも加藤清正の虎退治といって、やはり巨大な虎を出しています。このように新しく加わったところがそれぞれに何とか人目を引く出し物を、と工夫していたときです。

東野は大正9年には、張りぼての獅子では駄目だということで、名古屋の業者に発注して木製の獅子頭を作りました。このときに脇に取っ手をつけて舞う形にしたんですが、それも牛牧に倣ったものでした。

後藤伊作 そしてもう一つ、瑠璃寺の獅子舞の広がり忘れてはならない人物が後藤伊作です。彼は大島山に生まれ育った人で、旧姓は福田です。この人は三男で、笛とか獅子頭の使い手の名手でした。でも江戸時代であれば獅子に触れなかつたと思うんです。ところが明治になって、三男の後藤伊作でも獅子に触ることができた。そして名手になった。それが伊賀良の上殿岡へ婿養子に行きました。そしてその周辺に獅子を教えるんですね。上殿岡、名古屋、北方、羽場権現堂、飯田大平、一色、こういった所に広めていきました。上殿岡には、今回の展示にある肖像画を獅子の師匠と讃えて飾っています。羽場の獅子舞でもこの肖像画を掲げています。後藤は獅子舞を教えるときに、まったく同じに教えたのではなく、少しずつ違えて教えたといわれています。こうして屋台獅子は広がっていきました。

伝播の様子を模式化した図を掲げておきましたが、この説明は割愛します。まず城下町とか旗本のお膝元で生まれたものが、寺院の法会や周辺の神社の春祭りへと広がって行ったことを示しています。

獅子の変化をみると、もともと大神楽であった所が巨大な獅子に直していきます。それは、「より華やかに」として、都市祭礼の風流、名刹寺院の法会、社寺や集落の祝賀、御大典や御成婚・御誕生・戦勝などの国家的なお祝い、「若者たちの新たな団結の証」として最初は人形芝居、その次に歌舞伎、その次に今度は新たな出し物として巨大な獅子にたどり着くわけです。

あと「経済的な余裕」、そして「道路の改修・拡張」です。何より道路が広くなると獅子は曳けないんです。ですから明治の終わりから大正、昭和にかけて道が広くなるとともに、この巨大な獅子が広まってきます。瑠璃寺では境内の参道だけですから曳けたわけですね。でも集落内ではそういうわけにいかないわけです。

6. 屋台獅子舞にみる創意工夫

瑠璃寺は五台山文殊信仰、牛牧は三国志になぞられました。羽場獅子は天狗が曳く形にしました。後藤伊作が

教えたのですが、ここは明治 39 年に今宮の祭りで煙火の大筒が爆発して死者がでました。それが裁判沙汰になり、羽場出身の今村力三郎に頼んで、結局、裁判には勝ちましたが、そのときから煙火を止めて、新たな芸能としてこの巨大な獅子を始めたのです。宇天王ではなく天狗に曳かせたというのは、この背後にある風越山は天狗が住む山だというモチーフに倣ったからです。

座光寺の麻績神社では、桜丸・梅王・松王、つまり歌舞伎や人形芝居の「菅原伝授手習鑑」の三兄弟になぞらえています。荒事で有名な「車引き」段の名場面では、三人の背後に牛車に乗る藤原時平がいて、それに仕える松王がいます。そこに敵対する弟二人が揃って、三人で見栄を切る場面です。藤原時平が乗っている牛車を獅子に変えたわけですね。ではなぜ歌舞伎の名場面を取り入れたかと言いますと、この座光寺というのが長野県宝の舞台校舎が建築されたように歌舞伎が非常に盛んだった。そこでこういった形を作り出したと推測できます。

もうひとつ、三人の兄弟が頭の上に熨斗を掲げています。歌舞伎でも力紙をつけますが、実は「菅原伝授手習鑑」ではなく、「暫」などの外題で付けます。座光寺ではこの力紙を熨斗に替えているんですね。ではなぜ座光寺が熨斗を掲げたかと考えますと、天保 2 年（1831）に伝馬町から出火して 63 軒を焼く火事がありました。その時に座光寺の人たちがいち早く駆けつけて非常に活躍した。その褒美として堀公から賜った酒樽に結熨斗がついていたので、自分たちの誇りとして結熨斗を若連中の町印に使うようになった。これがこの熨斗に変わってきたんだらうと考えられます。

このように火災で活躍した例は、牛牧にもみられます。城下の火事で駆けつけて活躍したため輪違い紋を賜った。松尾の明でも三亀甲紋を賜って、今も消防のマークとして使っています。

座光寺の麻績神社の獅子の歴史をみると、決して順調に来たわけではなく、獅子が起こった文化元年（1804）以降、何度も復活、廃止をくり返してきました。とくに明治 24 年（1891）には、「そんな芸事やっていたんじゃ駄目だ、もっと経済的な活動をしなさい」、という風潮のなかで獅子舞を止めてしまいます。しかし、明治 33 年になって若者の欲求不満から復活するんですね。たぶんこのとき、大型の屋台獅子にして歌舞伎に倣った三兄弟に曳かせる形を作り上げたと推測できます。

下市田の獅子もやはり同じように三兄弟が曳きますが、橋都正さんの聞き取りにもあるように、座光寺のほうが 2、3 年早かったと考えられます。

そのほかに、女性が着物を着て獅子を操ったり、おかめが操ったりします。子安神社の系統といわれています。あるいは花笠踊りの子どもが付いたり、ひょっとこが付いたりもします。新田の虎舞は、いつから起こったのかよくわからないのですが、でもこのように巨大化したのも屋台獅子の影響を受けたためだと思います。

そして最近になって黒牛という新たな獅子舞が生まれたり、今年の獅子舞フェスには、おろちという空気で膨らませるのが登場したり、いまもって獅子舞は変化を遂げ、発展しています。

生田とか中川では、歌舞伎の「国姓爺合戦」になぞらえて和藤内が獅子を先導します。中川から駒ヶ根の方へいくと、最後に獅子の首を切り落とします。獅子が悪者になってくる。そういう変化も現れてくるわけです。

7. 獅子舞からみえるもの

では、獅子舞から何がみえてくるでしょう。一つは、工夫を凝らして変わりゆく民俗芸能、新たな獅子舞の創出、子ども獅子の誕生についてです。そして、私がなにより獅子舞に魅力を感じるの、そこに人が見えるということです。後藤伊作もそうですし、獅子を伝承したり巨大化したりした人あるいは地域の想いが、獅子の中から見えてくるということ。また、獅子が地域のアイデンティティの核になりうるということ。獅子があることで若者が集って活動ができる、地域の中で活躍ができるということです。

近世以降の村々の芸能を担ったのは、おもに若者たちです。まず若者たちが情熱を燃やしたものに、江戸時代の中ごろに入ってきた人形芝居があります。そこに歌舞伎が入ってくると流行が移っていきます。片方ではお囃子がマチを中心に行われます。それが合わさったところに、屋台獅子や籠獅子という大型練獅子が生まれてくる

わけですね。流行をどんどん追ってここに辿りつくところもあれば、今田黒田のようにいち早く人形芝居を始めたところは、それを自分たちの誇りとしてやり続けるわけですね。

若者組は15歳から25歳。男しかも長男に限る、特定の家や人に限るなど、封建的な部分がありました。けれども、若者だけではできなくなると壮年を加えるようになりました。25歳で止めていたのが40歳までやるとかですね。それが保存会という組織に変わってきます。さらに現在、子どもや女性まで加わって、とくに子どものお母さん方、PTAが加わってやる形に変わってきています。

屋台獅子舞の分布をみると、南は下條のあたりから北は駒ヶ根の大宮五十鈴神社までです。大田切川までにこの屋台獅子が分布しています。その分布は、煙火の大三国の分布とまるっきり重なっています。そうすると、ここに共通した一つの文化圏があることがわかってくるわけですね。

おわりに

冒頭に言いましたように、獅子舞というのは割と新しいものですから文化財になりません。国の文化財にはなりません。瑠璃寺の獅子が県の文化財になっているのが唯一です。その古さだけが価値ではないということです。

その一方で、明らかに明治になって始まった獅子舞にもかかわらず、新聞に400年の歴史を持つ獅子とか載ることがあって、「えーっ、どこからそんなのが出てくる？」などと私などは首をかしげることがあります。こうした偽った言説が生まれる背景は、古いことに価値があるという考え方が根強いからですね。でもそうした古いことだけではなく、やはりそこに自分たちの先人がどういう思いでやってきたのかという、そのことこそ価値がある、そこに価値を見出すべきだと考えます。

冒頭に『高森町民俗芸能史』を紹介しましたがけれども、この本は本当によくできています。いろんな変遷、出来事が洩れなく盛られている。やはり自分たちの担っている歴史と文化というものをきちんとまとめて、それを把握し確認しながらやっていくということが非常に大事なことだろうと思います。

そしてやはりこういった優れた文化というものを次世代に繋げていく。現在、長野県の地域政策局と南信州広域連合が中心となって「南信州民俗芸能継承推進事業」を進めています。この南信州を考えた場合に、やはり芸能こそがこの地域の持続可能な地域を作り上げる力になるだろうということで、今、そういった事業を立ち上げ取り組んでいます。

こういった民俗芸能を大事にしていきたい。現に高森町ではそれを本当に大事にして町の文化財にしていることに、私は本当に敬服していますが、そういった動きを南信州全体にもっともっと広げていくことが大事ではないかと考えています。

これで私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

